

武田泰淳「王者と異族の美姫たち」論

—草稿類資料を手掛かりに—

孫 森*・吉村 誠**

An Essay on Taijun Takeda's *Kings and Beautiful Princesses of Different Tribes*
— Based on Draft Materials —

SON Shin*, YOSHIMURA Makoto**

(Received September 29, 2023)

本論は、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における未発表の草稿類資料「原稿 天命」(資料番号 T0056535)などを考察対象として取り上げ、草稿と初出本文との異同を検討することで、「聖王」「悪王」像が明確化され、美姫たちが格上げされ、「幸福な重耳」と「天命」が削除されたというテキストの生成過程を明らかにした。生成過程を踏まえ、改稿の時代背景から武田の「気持」を理解し、具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」(中国古典)の「現代」的意義を検討した。本小説において「悠久のもの」の「現代」的意義は、動乱の1960年代に面して、武田が「現実のきびしさを考える場合に」、「悠久のもの」から「よりどころとなり得るもの」である「徳」あるいは「王者(徳の高い人)」を追究し、「武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国」を強調し、中国古典を通して「現代」の難題を問い直したことでありと思われる。

一、問題提起

1934年の初めごろ、中国文学研究会が発足し、「君達は眼先の文化、現代の末梢だけに気をとられ、支那思想の本流を棄てている」¹という忠告に対して、同人たち(竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫ら)は「今にいつか、支那古典について、自分の考えをのべることにしよう、とその頃から腹の中では誓い合っていた。」²と「司馬遷」(1943)に記載されている。1937年、輜重補充兵として戦場に派遣されてから、武田は中国の古典『史記』について考え始めた。「(前略)現実のきびしさを考える場合に、何かよりどころとなり得るものが、『史記』にはある、と思われた」³と述べていることが「司馬遷」(1943)から知られる。武田は、1943年書き下ろした評論『司馬遷』を東洋思想叢書の一冊として発表し、その後、小説「女帝遺書」⁴(1949)と小説「王者と異族の美姫たち」⁵(1967)という『史記』に関する作品を相次いで発表した。1967年雑誌「別冊文芸春秋」に発表された「異族の美姫たち」(講談社版の創作集に収録する際、「王者と異族の美姫たち」に改められた)は、武田が『史記』などから

素材を得て、中国春秋時代、晋献公の妃の驪姫が太子申生を陥れ、公子重耳と公子夷吾を亡命させ、自分の子を即位させたが、最終的に重耳が晋文公になることを描いた。

本小説の創作意図について、武田泰淳は対談「戦争と中国と文学と」(竹内実・武田泰淳)(1974)において、以下のように述べている。

武田 僕が「才子佳人」を書いた時の気持は文化というものはかなさ、才子佳人のはかなさを書こうとしたんです。だから戦後改稿して発表した時には、非常に古くさい、何を今さら古いことに執着を持って、と思われて、大変保守的なものにとられましたね。本人は荒々しい現実の中で文化の残っていく姿を、堀辰雄のような気持でなるべく静かに書いた。だからレジスタンスのつもりなんです。ただ一般の人にはそんなこと分からないし、分かりにくい小説と言われました。竹内 時代の状況が違って来たわけですね。

武田 ええ。だから同じことは「天命」を戦後改稿し

* 魯東大学外国語学院日本語学科講師 ** 山口大学名誉教授

た「王者と異族の美姫たち」でも言われました。悠久なものがなぜほしかったかという気持ちが分からないと、なんで「左伝」なり「史記」に書かれていることが現代に必要なんだということになるわけです。僕の気持としては王者、徳の高い人というのはあると思うんですよ。それは存在する意味があるはずなんだ。特に異族の美姫というもの、胡姫と言って漢民族がほしがってよくさらってきたのですが、僕はそれにとっても魅力を感じて好きなんだな。⁶

下線部の内容より、小説「王者と異族の美姫たち」は草稿「天命」をもとにして改稿されたものであることがうかがえる。また、「王者、徳の高い人」が「存在する意味があるはずなんだ」と強調したかった武田の「気持」がわかる。「悠久なもの」（中国古典）の「現代」的意義を追究したいという武田の「王者と異族の美姫たち」の改稿意図の一つが見られるのであろう。

「王者と異族の美姫たち」に関する先行研究のうち、杉浦明平は「独特のわらいとレアリテー武田泰淳『わが子キリスト』」（1969）において、「今の日本の作家で、中国的なおおらかさと同時にとりこめない奔放さでわたしたちをとりこにするのは武田だけだから」と好評すると同時に、「えらくあっさり終っちゃったというのが、わたしの落胆をまじえた感慨である」⁸と小説のものたりなさを嘆いた。兵藤正之助は『武田泰淳論—昭和史に閃爍する作家』（1978）において、「（前略）といった主要人物の性格のホリを明らかにする会話が、全篇にあり、この小説を単なる筋書きだけの宮廷陰謀物語に墜さぬものとしているからである」⁹と登場人物の鮮明な性格を表す会話を高く評価した。井口時男は「武田泰淳の『世界』（2005）において、「彼（重耳、引用者注）は、純粋たりえぬ自分自身の矛盾を自覚し、その矛盾に耐えているのだ。『ひかりごけ』の船長は、他の生命を食わなければ生きられない人間の条件を『我慢している』のだといった。重耳もまた、『我慢している』男である」¹⁰と重耳の我慢しつつける忍耐の思想を指摘している。

先行論において、あっさりした終わり方や優れた会話、主人公の我慢の思想など、様々な角度から小説が論じられてきた。ただし、一般の人に「わかりにくい」と言われた後、武田は対談（1974）で「王者、徳の高い人」が「存在する意味があるはずなんだ」と伝えたかった自身の「気持」を表したが、これまでの研究はそれに関連する論点に触れていない。また、「王者と異族の美姫たち」草稿の調査・研究は管見の限りではまだ行われていない。「王者と異族の美姫たち」の草稿に関しては、『武田泰淳全集増補版』に付けられた、古林尚氏執筆の「年譜」と「解題」に言及がないが、実際には、前述の対談

「戦争と中国と文学と」（1974）において、「『天命』を戦後改稿した『王者と異族の美姫たち』と述べたとおり、本小説は戦争下で書きためられていた旧稿に加筆訂正がほどこされたものである。この草稿を手掛かりにして、「王者と異族の美姫たち」という作品をさらに深く研究し、新たな評価を生み出す可能性が出ると思われる。

本論は、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における未発表の草稿類資料「原稿 天命」（資料番号 T0056535）などを考察対象として取り上げ、草稿と初出本文（初出本文は筑摩書房刊行の『武田泰淳全集増補版』第1巻（1978）に拠る）との異同を検討しテキストの生成過程を分析する。生成過程を踏まえ、改稿の時代背景から武田の「気持」を理解し、具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」の「現代」的意義を検討したい。

二、「王者と異族の美姫たち」関連草稿

日本近代文学館に所蔵されている武田泰淳コレクションは、2005年と2008年に令嬢武田花氏から寄贈され、「司馬遷」「風媒花」など主要作品の原稿・草稿、写真などを含むものである。本論で取り上げるのは、武田泰淳コレクションのうち、小説「王者と異族の美姫たち」に関する草稿資料である。続いて本小説の関連草稿を確認してみたい（資料番号は文学館によって付されたもの）。

1、「原稿 天命」（資料番号 T0056535）

使用された原稿用紙は左右それぞれ縦20字横10行の升目がある四百字詰めのもの。欄外上中央に「頁」、右欄外上部に縦書きで「善為士者不武」、左欄外下部に縦書きで「田車既好」と印刷されており、計三十八枚ある。本文は黒ペンが使用される。この草稿はそのまま誰かに読まれることを想定するようで丁寧に書かれたものである。本草稿は戦時下で書きあげられているが、当時の社会情勢から、発表するあてもないままに保存されていた。本草稿と小説の初出本文の内容はかなりの部分が対応する。

2、「草稿 王者と異族の美姫たち」（資料番号 T0056786）

原稿用紙は縦20字横10行の升目がある二百字詰めのもの。欄外左上に（ ）、欄外左下に10×20と印刷されており、計七枚ある。この草稿は字がぞんざいで、ページ番号がなく、草稿そのものを誰かに読んでもらうということが想定されていないようである。本草稿に執筆日が明示されていないが、「『秦女』とは、一九六〇年代の世界にたとえれば、アメリカ女、ソ聯女にあたるのでしょ」¹¹という記述があり、「王者と異族の美姫たち」が1967年に発表されているので、おそらく本草稿は1960年代に執筆されたものと推定される。また、欠落が多く、

現存の部分について、『武田泰淳全集増補版』の初出本文と比較すると、以下の内容のみは初出本文とある程度の関連性がある（文中の○は解読できない文字を示す）。

【引用1】申生にといえ、美と徳は、全くちがったものでありました。そして、○は、美○○○○、徳をえらんだのです。○○、○○は○、○にとって、美のないところに、徳はなかったのです。そして、徳と美が対立するものなら、美をえらぶのです。では、○吾○○、○は、美も徳も信じなかった。○○○美も徳も、○○○
○。黒い悪か○○

【引用2】○○○貼○○○ているのか、明らかに見えていたからです。○吾は「見える人」であり、重耳は「見えない人」であった。重臣たち○荀息も里克もそれを知っていたはずです。賢臣が「見えすぎる王子」をよるこばなかった。

3、「原稿 王者と異族の美姫たち」（資料番号 T0056430）

原稿用紙は縦20字横10行の升目がある二百字詰めのもの。欄外左下に「（岩波書店原稿用紙）」と印刷されており、計180枚ある。赤ペンの痕跡が残され、内容が初出本文と同じため、本草稿は発表される直前に校正の段階のものと思推定できるとされる。

上記の関連草稿を時系列に整理すると、次のようになる。「原稿 天命」（T0056535）→「草稿 王者と異族の美姫たち」（T0056786）→「原稿 王者と異族の美姫

たち」（T0056430）。ただし、「草稿 王者と異族の美姫たち」（T0056786）と初出本文との対応が少なく、「原稿 王者と異族の美姫たち」（T0056430）と初出本文と一致しているので、本論は両者とも検討対象から除外することにする。以上の草稿類資料の検討を踏まえ、まず対談の中での武田の「『天命』を戦後改稿した『王者と異族の美姫たち』」という発言から出てくる草稿「天命」を用い、小説「王者と異族の美姫たち」の生成過程を分析したい。

三、草稿「天命」と初出本文との対照表

草稿「天命」と初出本文（『武田泰淳全集増補版』に拠る）をストーリーの展開にそって便宜的に箇条書きにまとめ、対照表として図式化し、以下のように提示してみたい。なお草稿に見えて初出本文には見えない個所には破線の下線（.....）を引き、初出本文に見えて草稿に見えない個所には二重下線（====）を引く。①、②などの数字は草稿の文脈を基準として付したものであるので、初出本文において数字が順不同であり、また、同じ数字を二回記載する可能性がある。A、Bなどのアルファベットは初出本文のみに見られる記述である。未発表の草稿資料は四角で囲い、原文のまま引用する。それぞれの頁数を記して比較を試みる。

草稿「天命」と初出本文との対照表

草稿	初出本文
①美しく強くそして気高かった、古代の聖王のやうに濁りのない思想を持っていた太子申生は死ぬことによってその美しさを完成したのではあるまいか、と重耳はくりかへしわが胸に問ひただした。 弟の夷吾は自分より強く猛々しい男ではあるが、兄の申生のやうな不思議な美しさは感ぜられはしなかった。（1～2頁）	⑩夷吾と重耳とは驪姫をめぐる会話をした。重耳は、「どうしても、驪姫をおれのものにしたんだ」と発言した夷吾をたしなめた。 「あの女は、おれたち二人の、どっちを選ぶかな」という夷吾の揶揄のような質問に対して、重耳は「（前略）あの女は、この国がほしいのだ。（中略）なみなみならぬ女の知恵で、目をつけるとすれば、それはお前やほくではなくて、晋の国のあとつぎである、太子、申生さまではなかろうかね。（中略）この世の中には、男女の情というもののほかに、政治ということがらがあるんでなあ（後略）」と夷吾に返事した。重耳の言葉を受けて、夷吾は「だから、つきつめると、自分のほしい女を手に入れるためには、政治の力をにぎりしめなきゃならんわけだ」と述べた。（297～299頁）
	A夷吾と重耳との申生をめぐる会話の中で、重耳は「あの方（申生、引用者注）が徳のたかい、かけがえのない方だからそう言うんだ」と申生を褒めたたえ、それに対して、夷吾は「（申生が、引用者注）生きてるのか死んでるのかわからない、力のない男だ。（中略）晋の国を支配することなど、できるわけがない」「申生はおれた

	ちにとって、かけがえのない男なんかじゃありゃしない」と申生をけなした。(297頁)
②兄を殺されながらも重耳は加害者の驪姫に対して憎悪の念が少しも起って来なかったではないか。これは重耳が兄とは母を異にしてみたためであらうか。(中略)それでは驪姫が美しいからであらうか。(2～3頁)。父獻公の精力的な情慾に身を委せて大きな野心を抱いてゐる恐ろしい程美しい驪姫。驪姫こそは晉国を破滅させる妖女ではなかったか。(3頁)西方の部落驪戎を伐って手に入れた女であった驪姫は、獻公と共にこの子供(引用者注、奚齊)を晉の太子に立てやうといふ望みを抱いてゐた。しかし今にして思へば、たとへ奚齊が生れなかったとしても、(中略)驪姫と(中略)申生とは到底相容れない間柄であったのであろう。両者の争いを防ぎとどめられない重耳は、驪姫の肉体と申生の精神の引力の間で、あちらにひかれ、こちらにひかれて悩ましい日々を送ってゐたのであった。(3～4頁)	②重耳を生んだ女は異族の狐氏族の娘である。申生の母は齊の桓公の娘である。(299頁)皇太子(申生)は父の獻公が異族から持ち帰った驪姫を無視し、その妖しい美しさを卑しんでいる。(300頁)
③驪姫が重耳の側によって来ると、重耳はいつも逃げ出した。(中略)驪姫はおそらく、申生を敵として憎んでゐるても、弟の重耳をその夢の中で抱きしめてゐたのかもしれない。(4頁)	③驪姫は、避けようとする重耳にすりより、話をしかけた。「三人のうち、あなただけが好きなのよ。(中略)あなたが一番好きなひとは、だれ?」といった驪姫の話を受けて、重耳は「それは……。太子の申生さまです」と答えた。驪姫は「意地わるね。わたしは一番きらいなのは、あの申生だと知っているくせに」と返事した。(300～301頁)
	B夷吾と重耳とは政治の話題に変え、夷吾は「悪知恵で万事うまくいくなら、おれが天下をとれることはわかりきっている」と発言し、重耳は「太子の申生さまが、晋の国のあとつぎになるのが、何よりよいことだ。そうすれば、晋の国は武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国になることができる」と言った。(301～302頁)
	②「あの女(驪姫、引用者注)の生まれた部落はおれたちの国がほろぼしてしまった。あの女は、祖国のために復讐するつもりで、よからぬことを企んでいるのだ。あの女は、復讐のためにも、自分一身の保全のためにも、どうしたって、この晋の国がまるごとほしいんだ。(中略)」と夷吾は言った。(302頁)申生は父の獻公に遠ざけられた。奚齊(驪姫の子)を太子の位につけることができれば、驪姫の野望の第一歩が踏み出されたことになる。(302～303頁)
④驪姫は太子申生に対する陰謀を計畫してゐた。(中略)太子はしかしすべてを察してゐた。女が自分の命をねらってゐること、父も女と共に自分を排斥しはじめたこと、そしてそれが避けることのできない天の命のやうに自分に迫ってゐることを知悉してゐた。だが太子申生はだまりつづけてゐた。だまりつづけることによって美し	④重耳は申生と話し合った。驪姫に嫌われ憎まれ、いつかひどい目に遭うことが分かっている申生は、「父上は、あの女なしでは一日として生きたこちがしないのだからね。その女を、父上の子としてないがしろにできるだろうか」と言い、「奪いとられてきた異族の女たちが、驪姫のようなはげしい抵抗の歯ぎしりと企らみをか

<p>さをます自己の精神のみを守りながら○に対しては身にふりかかる災何等防禦をしようとはしなかった。(4～5頁)</p>	<p>みしめるのは、あたりまえのことなんだからね」と述べた。(303～304頁)</p> <p>驪姫の侍女が申生を再度呼びかける間に、「ぼくは、国王になどなりたくありません」という重耳の発言を受け、申生は「なりたくなくても、ならねばならぬ者もいるのだ。(中略)彼女は天の命をさずかって我らにあたえられるものなのだから、我らは精神的に(お前は、肉体的にといいたいところだろうが)、正面からうけとめてやらなければならないのだよ」と述べた。(304～305)</p>
<p>⑤彼(重耳、引用者注)はもとより幸福にならうとは努めてゐた。だが、他人を幸福にできるとは夢にも思はなかった。これらの強い人人、兄と女と父とを幸福にしてあげる力が自分にはないことはわかり切つてゐたのであるから。(5～6頁)</p>	<p>削除</p>
<p>⑥里克は二番目の王子重耳こそ晉國を幸福に出来る人物だと見抜いてはゐたが、慎重な政治家であつたので表面にあらはれることはしなかつたのである。(6頁)</p>	<p>⑥里克は、自分の占いの結果として前途が「吉」と示されたのは重耳だけであることと、驪姫一派を殺す勧めを、重耳に話した。だが、重耳は王位を望まないで、驪姫一派を殺すこともできない。(305～306頁)</p>
<p></p>	<p>C「驪姫を生かすか殺すか、それが一国の政治のわかれ目なのである」。夷吾や献公は驪姫を守りたいが、里克や造反派は驪姫を抹殺したい。</p> <p>里克は「申生は両方の側から厄介な余計もの、とりあつかひにくい敵として、ほろぼされることになるのではあるまいか」(306頁)</p>
<p>⑦或る日情愛に溺れた献公の方から太子を廃して奚齊を之に代へやうと言ひ出したことがあつたが驪姫は泣きながらそれに反対した。「(中略)正統な太子を棄てて妾腹の子供をお立てになるなどと、その様なことをなさるなら私は自殺いたします」女は優しい言葉で答へたが、次の日から臣下の者に申しつけて王に向つて盛に太子をあしざまに攻撃させることを忘れなかつた。</p> <p>驪姫は「王様はあなたの母上の齊姜様のことを夢に御覧になりました。あなたはすぐに曲沃にお歸りになつて母上をお祭り下さい。そして祭りの肉を王様のもとへお送り下さいまし」と申生に言った。すでに彼には女のたくらみの底がわかつてゐた。(中略)自分のたくらみを知つてゐる太子がしかも自分の言葉にそむける筈のないことを知つてゐるので、女神のやうに自信を以て立つてゐるのだった。</p> <p>祭肉には女の手で毒薬が入られた。(中略)女は犬にそれを分ちあたへた。犬はたちどころに死んだ。位の低い臣下にそれを食べさせた。臣下はたちまち死んだ。そこで驪姫は静かにすすり泣きながら献公に申し上げた。「太子様は何といふ残忍なお方でございませう。父上をも殺して王にならうとなさるのでせうか。」(6～9頁)</p> <p>⑧太子はそのまま新城へ奔つた。(中略)太子の無實の罪を知つてゐるものに「父上は年老いてゐられます。驪</p>	<p>⑦驪姫は、献公が太子(申生)を廃して奚齊(驪姫の子)を後継ぎにしたいことにうわべだけで反対し、「正統の太子を棄てて妾腹の子供をお立てになる、そんな非道いことをなされたら、私は自殺いたすより仕方ございませぬ」と言いながら、申生への陰謀を企てる</p> <p>里克は「表でほめたたえているのは、裏であしざまにののしっていることなのですじゃ」など重耳に語り伝えた。(307頁)</p> <p>驪姫は、申生に亡母のお祭りを行うよう勧め、供えた犠牲の肉を献公に献上するよう促した。</p> <p>驪姫は、この肉に密かに毒を仕込み、犬、道化役の小人に毒味させたところ、両方も死亡した。献公は、申生が肉に毒を盛り、自分を殺害しようと企てていると誤解した。</p> <p>驪姫は「おとなしやかにふるまっていた御方が、ひともあろうに父君を毒殺!」と讒言を行った(306～309頁)</p> <p>⑧逃亡する前に、申生は「父上に長生きしていただくためには、夜はやすらかに睡り、昼は楽しく食事をしてい</p>

<p>姫がゐなければ、安らかに眠ることも、楽しく食事をすることもできません。私のことばで父上が驪姫を怒るやうなことになるれば面白くない結果になるのです」と答へただけであった。(中略) 曲沃の新城において自殺したのであった。(9頁)</p>	<p>ただくことだ。それには、あの女なしではすまされないではないか」と重耳に言った。弁解もせず、行動もせず、出奔して二カ月ほど、斉の国にとどまっていた。新年を迎える前に自殺した(309～310頁)</p>
<p>⑨あのやうにあさましく人をおとし入れたり、あのやうに苦しい精神の試練に堪へたり、それでもあれ等の人には幸福を求めてゐると言へるのだらうか。これらの強い人々にたちまちって、自分だけが何か幸福といふ夢を追つてゐる愚者なのかと、重耳はわれとわが身を怪しまずにはゐられなかった。(中略) 兄なればこそ、あの妖婦に對抗して、(中略) 自分にはあの妖婦に對抗する力があるであらうか。(9～10頁)</p>	<p>削除</p>
	<p>①狩獵を行う時、夷吾と重耳とは会話した。夷吾は「あんたは、まこと申生の奴が、美しい心のために自殺したのだと思つてゐるのか。申生は自分の弱さをとりつくり、自分の無能の言いわけをするために、ようやく生きていた男さ。(後略)」と申生の美しさを認めていない。それに引き替え、重耳は「お前がどう言おうと、ほくは兄上を信じてゐるよ。兄上は正しかった。それは、いつかはわかることだ」と申生の美しさを認めていた(310～311頁)</p>
<p>⑩二人が別れる時、夷吾は獍猛な顔を重耳の顔へすりよせて「俺はあの妖婦を自分のものにし、あの女の子供を殺し、そしてあなたさへよければ晉の國の王となるつもりだよ」とささやいた。(10～11頁)</p>	<p>⑩夷吾と重耳とは出奔し別れる時に、夷吾は「あの女はな。あの女はもう、おれのものなんだ。一夜だけなんだが。おれはもうあの女を抱いてしまったんだ。」と自分が驪姫と一夜を過ごしたことを重耳に言った。(311～313頁)</p>
<p>⑪重耳のゐる蒲の役人のある者は、王の内命を受けて重耳に自殺をすすめた。(中略) どんなことをしても幸福をつかむまでは生きてゐたかった。重耳は垣を踰えて逃れ去らうとした。(中略) ついに翟に奔った。重耳は、里克の「天の命によってあなたは王者になる様に定められてゐます」という豫言が嫌であった。(中略) 里克はきっと弟の夷吾のもとへ行つても同じやうなことをのべたててゐるに違ひない。夷吾は相次いで屈、梁へ亡命した。</p> <p>それにつけても、兄のやうに冷徹な精神を保つこともできず、弟のやうに強烈な目的に対する意慾を抱くこともできず、いつも行動のよりどころとなるものを持たずに月日を過してゐる自分が情けなくなるのであった。(11～14頁)</p>	<p>⑪重耳は蒲へ逃げ入り、自殺を勧められたが、脱出し翟へ亡命した。重耳は、里克の自分に対する予言が真実らしく思いながら、里克が弟(夷吾)にも王位継承を保証していると疑つた。</p> <p>夷吾は相次いで屈、梁へ亡命した。(313～314頁)</p>
<p>⑫重耳は咎如という異族の女をあてがわれたが、幸福にはなれなかった。驪姫がもし妻として自分と起居を共にしてくれたら或は甘美な幸福がやってくるかもしれない。(中略) それは太子申生の精神に背き、はてはその精神の美しさにあこがれる自分自身を破滅させることになるであらう。(中略) しかし妻は彼の心などにはおか</p>	<p>⑫重耳は咎如という異族の女をあてがわれた。</p>

<p>まひなく忠實な愛情を捧げてくるのである。まるで天の命に従ふかのやうに、夫の命を大切に守り、重耳以外のことは念頭にないかの如くなのである。しかし妻は彼の心などにはおかまひなく忠實な愛情を捧げてくるのである。まるで天の命に従ふかのやうに、夫の命を大切に守り、重耳以外のことは念頭にないかの如くなのである。(14～15頁)</p>	
	<p>⑮<u>咎如の女の「お国へ帰ることは、しばらくおやめ下さい」といった教えを守って、重耳は里克の勧誘を断った。</u>(315～317)</p>
<p>⑬やがて晉國の危機がせまって来た。献公が死んだのである。里克は重耳を晉の王者として迎へ入れるために叛乱を起してゐた。里克は相次いで奚齊、卓子を刺殺した。忠節を尽くして荀息は自死した。(15～16頁)</p>	<p>⑬献公の没後、荀息は奚齊を即位させた。里克は奚齊を刺殺した。荀息は奚齊の弟の卓子を即位させた。里克は卓子を殺害した。忠節を尽くして荀息は自死した。(317頁)</p>
<p>⑭何故あの男はそれ程までに自分を王位につけたいのであろうか。(中略)荀息を殺すといふことは、荀息の持つてゐた冷いまでに正しい精神、あの申生の守つてゐた精神に反抗することであつた。(中略)重耳は心ではこの精神に対するあこがれを棄て去つてはゐなかつたが、しかもその精神のために闘ふ氣持とはなかつた。(中略)目撃することのできなかつた驪姫の最後の一場面は、空想の色彩あざやかに、白昼の夢となつてゆらぎ立つて来るのである。(17～19頁)</p>	<p>⑭里克は驪姫に夷吾に手紙を書かせた。夷吾が帰国する前に、里克は<u>奴隸に危険人物の驪姫を殺させた。</u>(317～320頁)</p>
<p>⑮あはただしい行方定めぬ力の争ひのさなかにあつては、一度ぐらい自分の意志を主張して見ることも必要の様思はれた。重耳はそこで次の様な理由をつけて晉へ歸ることを拒絶した。(中略)里克はただちに梁にゐた夷吾を王として迎え入れた。(中略)彼が王となるのを拒絶したのは、(中略)いはば、あまりにも行動性のない自分自身を驚かしてやらうとする悪戯にすぎなかつたのだ。それなのに人民と君子達は、「重耳は賢明である」「翟の公子は王者の風格がある」と語りつたへ、賢明な王子重耳を王にせよといふ叫びはいたるところできこえるやうになつた。(19～21頁)</p>	<p>⑮夷吾は即位した。(320頁)</p>
<p>⑯夷吾が敵視しはじめたのは自分を擁立してくれた大臣里克であつた。里克が自分より先に兄のもとへ使者をやつてゐること、自分の擁立者として自分に独裁権をあたへないこと、そしてやがて自分を暗殺する陰謀の中心者となるかもしれないといふ理由があつた。夷吾は(中略)「かかる大逆罪を犯したからには、到底、一國の大員として生きながらへることは出来ませぬ」と申しわたした。(中略)その場で里克は劔に伏して自殺してしまつた。(20～22頁)</p>	<p>⑯驪姫殺害の真相をつかんだ夷吾は、里克を誅殺したいが、私怨だけでは理由にならないので、「<u>あいかわらず、翟にゐる重耳と連絡をたもち、わが晋國を転覆せんとくわだててゐるではないか</u>」と里克に罪を着せた。里克は自死した。(320～322頁)</p>
<p>⑰秦が饑饉の晉國に穀物を送つてくれた恩を忘れて、後になつて饑饉になつた秦を攻撃した。(中略)人民も君子も、晉王夷吾を憎悪するやうになつた。(23頁)</p>	<p>⑰秦國が晋國を侵し、人質として晋の太子は秦へ送り届けられた。晋では凶作なので、秦は救援物資を投入した。秦が飢饉に苦しんだとき、夷吾は支援をしなかつた。夷吾の評判は、悪くなり、重耳の声価は上昇した。</p>

	<p>おびただしい殺害事件、とりわけ、驪姫の惨死は、重耳の胸をかきむしった。</p> <p>秦との小競り合いで、晋軍が大敗した。(322～323頁)</p>
⑱夷吾が勇士を派遣して重耳を暗殺するため、重耳は咎如の女と別れ、衛の国を通過して、斉の国に着いた。(23～26頁)	⑱刺客がしばしば重耳の身边を襲っていたので、重耳は咎如の女と別れ、衛の国を通過して、斉の国に着いた。(323～324頁)
⑲斉の桓公は重耳を迎え入れた。斉の王家の女の妻を持って「幸福をつかんだ」と信じた重耳は、斉を離れようとは思わなくなっていた。斉の女の侍者が賢い家臣達の重耳を連れて斉を出発する計画を盗み聞きして斉の女に告げるが、斉の女は、漏洩を恐れて侍者を殺し、重耳に斉からの脱出を勧めた。だが、重耳は聞く耳を持たなかった。そこで斉の女は家臣と謀って、重耳を酒に酔わせ、車に載せて斉を出発させた。(26～31頁)	⑲重耳は斉の桓公に歓迎された。斉の王女の妻を持った重耳は、斉を離れようとは思わなくなっていた。王女の侍臣が賢臣らの重耳を連れて斉を出る計画を盗み聞きして王女に告げるが、王女は漏洩を恐れて侍臣を殺し、重耳に斉からの脱出を勧めた。だが、重耳は聞く耳を持たなかった。そこで王女と賢臣らとの図りにより、賢臣らは酔ってしまった重耳を車に乗せ、無理やり斉から連れ出した。(324～328頁)
⑳艱難な旅行、各国の支配者との接触が次第に彼を王者らしく強靱な人間にして行った。(中略) 幸福をもとめる胸のやはらかみが消え失せ、焼きつくやうな濃度を持った「力」が全身にみなぎってくる。 人質となっていた晋の太子子圉が秦から逃げた(31～32頁)	⑳長老は重耳に幸福などというささやかなよりどころをあきらめなければならなく、学び続けてほしいと忠告した。 重耳は巡遊し学び続けた(328頁)
㉑楚の成王の「あなたが歸國されたら、私に何を御禮として下さいますか」という尋ねに対して、重耳は「もし万止むを得ない事情であなたと戦場でお目にかかり戦を交へることになりましたら、私は九十里退却して、あなたに御恩返しませう」と答えた。重耳は家臣の言葉にしたがったといふ形で、五人の女を妻にしたのである。 (中略) やがて秦の軍に守られた重耳主従は晋の國に入り、重耳は晋の王となった。(中略) やがて重耳の豫言した如く晋軍は楚軍と戦を交へた。約束どほり、晋の軍は九十里退却した 隠者介子推は「天の命に依って成功したくせに、自己の力によって成功したと誇稱する人人を嫌悪して山へ隠れた」ともいはれる。(32～38頁)	㉑秦の五人の美人をもらい、夷吾が死ぬと、国内外の声援の下に、王位についた。(328頁)
㉒天の命を受けて王となった幸福な重耳に一生涯でのおどろきが絶えなかったなどと何處の歴史家が物語るであらうか。(38頁)	㉒「『文公』という、最上の称号をおくられて、彼(重耳、引用者注)はいとも幸福そうに、(傍点が原文に付されたもの、引用者注)一生をおわたた。」 文公は人々から称賛され、歴史家からは王者の代表として生涯を書き残された。しかし、人々や歴史家は「当の王者の本質について、とうてい不可解なのに、明らかすぎると錯覚していたにすぎないのである。」(328～329頁)

以降本論中の丸数字、アルファベットはこの表の記号に対応する

四、「王者と異族の美姫たち」の生成過程

本節は以上の対照表を通して、テキスト間の類似点と相違点を明らかにした上で、本小説の生成過程を以下の三つの方面から考察したい。

1、「聖王」「悪王」像の明確化

1) Aについて。初出本文において、夷吾の「(申生が、引用者注)生きてるのか死んでるのかわからない、力のない男だ。(中略)晋の国を支配することなど、できるわけがない」¹¹という申生をけなした内容を付加した。Aにおける夷吾の申生に対する否定的な評価を付加することで、夷吾と申生との対立関係が浮かび上がっていると思われる。

夷吾のマイナス評価に対して、重耳は「あの方(申生、引用者注)が徳のたかい、かけがえのない方だからそう言うんだ」と申生を褒めたたえた。草稿には申生の「精神的な美しさ」のような表現が存在するが、申生の「徳」に関する表現は見られない。草稿に書かれていない「徳のたかい」という言葉を加えることで、申生の聖王の人物像がさらに明らかに現れ出ていと言えよう。

2) Bについて。夷吾と重耳との会話で政治の話題に変え、夷吾は自分の「悪知恵」に関して以下のように述べている。

「(前略) 攻撃と防禦。妥協と裏切り。仲よさそうに手を結んでおいてから、相手の手もキモも、もろにひきぬいてやる。やさしくしてやる。おどかしてやる。殺したり、命をすくったり、とめどもないどんでんがえしで、おれたちより強い奴の目をまわさせてやる。おれたちより弱い奴ら、それはどうにでもなる。(中略) 悪知恵で万事うまくいくなら、おれが天下をとれることはわかりきっている。」(初出本文301頁)

引用部分から、夷吾が相手に勝ち抜き天下をとるために、毒と優しさが絶妙に配合された悪がしこい知恵を働かせることがうかがえる。注意すべきなのは、草稿¹²にも初出本文¹³にも、晋が凶作なので秦は救援物資を投入し、秦が飢餓に苦しんだ時に夷吾が支援をしなかったというプロットが存在するという点である。このプロットによって人々に憎悪される夷吾の「悪王」像は描写されているが、初出本文において、夷吾が自分の「悪知恵」を叙述することで、「悪知恵」で天下をとるといふ夷吾の「悪王」の人物像はいっそう明瞭に読者の目の前に浮かんでくるとと思われる。夷吾の「悪知恵」に対し、重耳は申生の「徳」について以下のように述べている。

「太子の申生さまが、晋の国のあとつぎになるのが、何よりよいことだ。そうすれば、晋の国は武力と悪知

恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国になることができる」(初出本文302頁)

重耳は、悪王である夷吾が国君になって武力と悪知恵で国家を治めることより、徳があり立派な政治を行う聖王である申生が晋の後継ぎになって、徳によっておさめられる静かな国になるほうを希望している。ここで思い浮かべるのは、前述の武田の対談「戦争と中国と文学と」で語った「僕の気持としては王者、徳の高い人というのはあると思うんですよ。それは存在する意味があるはずなんだ。」という改作意図である。武田が「悠久なものがなぜほしかったか」というと、武田が「悠久のもの(中国古典、引用者注)」を利用して、中国古典における「徳」あるいは「王者(徳の高い人)」を抽出し、「徳/王者」によっておさめられる国の重要性を世間に唱えたかったからではないかと思われる。

まとめて言うと、以下の内容が言えるであろう。草稿に書かれていないAを付加したことで、夷吾と申生との対立関係が顕在化し、申生の「聖王」の人物像をはっきりあらわしている。Bを付け加えたことで、「悪知恵」を働かせ天下をとる夷吾の「悪王」の人物像がいっそう鮮明に造形し、武田の「徳/王者」についての追究が重耳の口を借りて述べている。つまり、ABの付加により、初出本文の中に「聖王」と「悪王」との対立・葛藤を組み込み、「悠久なもの」から「徳/王者」を追究するという武田の狙いは現れたと言えよう。

2、美姫たちの格上げ

1) ⑩とCについて。草稿¹⁴において夷吾と重耳二人が逃げ出し別れる時に、夷吾の「俺はあの妖婦を自分のものにし、(後略)」という言葉は、初出本文の冒頭の一文「どうしても、驪姫をおれのものにしたんだ」となる。読者を作品に引込むために重要な役割を担っている書き出しにおいて、武田は夷吾と驪姫との関係を提示した。ゆえに、後文にCの中の以下の地の文が付加されても、読者が唐突な印象が感じられないと思われる。

女の命は守ってやる。そのかわり、その肉体と王位は自分のものにする。それが夷吾の立場だった。異族の美姫をころす。それから、重耳を即位させて晋の国土を安泰にしたい。それが、里克の立場である。驪姫を生かすか殺すか、それが一国の政治のわかれ目なのである。彼女に味方することは、父献公をはじめ現狀維持をねらう実権派に味方することであり、彼女に反対し彼女を抹殺することは、つまるところ武装革命をくだだてる造反派の仲間入りすることなのであった」(初出本文307頁)

「驪姫を生かすか殺すか、それが一国の政治のわかれ目なのである」という言葉の付加によって、驪姫の生死は一国の政治の成り行きを左右するかぎとなり、初出本文において驪姫が担う役割が大きくなっていると言える。

また、草稿⑩、初出本文⑩における出奔し別れる時に、夷吾の重耳に対する発言は、それぞれ以下のように述べている。

二人が別れる時、夷吾は擻猛な顔を重耳の顔へすりよせて「俺はあの妖婦を自分のものにし、あの女の子供を殺し、そしてあなたさへよければ晉の國の王となるつもりだよ」とささやいた。(草稿11頁)

「あの女はな。あの女はもう、おれのものなんだ。一夜だけなんだが。おれはもうあの女を抱いてしまったんだ。」(初出本文312頁)

草稿⑩と初出本文⑩との比較により、以下の相違点が見られる。草稿においては夷吾が驪姫を自分のものにしたとされているのに対して、初出本文においては夷吾が驪姫と一夜を過ごしたと設定されている。この改変から、夷吾と驪姫の愛欲の関係をさらに強調しようという武田の意図を見て取れると言える。これも驪姫が初出本文の中で果たす役割が重要となることの傍証であろう。

2) ⑭について。草稿⑭にも初出本文⑭にも、驪姫が殺されたことが言及されているが、初出本文⑭において、驪姫が殺される前に、里克が驪姫に夷吾宛の手紙を書かせ夷吾に帰国を勧めたという設定は、以下のように付加されている。

「梁にかくまわれている夷吾さまに、これから使者をさしむけねばならぬ。あなたからも、未来の国王さまに一筆かいてやったらどうかの。そうすれば、さだめし夷吾さまも勇気百倍、この晋の国、つまりは可愛いお前さん目がけて、馳せもどってきなさるだろうよ。すんだことは、すんだことだ。これからのお前さんは、あの男を楽しく王位にとどまらせておく美しい餌になるのじゃ」(初出本文318頁)

「ぜひ、おもどり下さい。わたしはあの夜の約束どおり、あなた様をお待ちしております」(初出本文318頁)

以上の引用文はそれぞれ、里克が驪姫に夷吾宛の手紙を書かせ、夷吾に帰国を勧めるといった要求の言葉と、驪姫が夷吾に送った手紙の内容である。里克は重耳に帰国して即位するよう伝えたが、重耳は里克の提案を拒絶し

た。そこで、里克は夷吾を帰国させて擁立した。初出本文において、驪姫の手紙が確かに夷吾には効き目があり、驪姫が夷吾「を楽しく王位にとどまらせておく美しい餌にな」った。草稿にはない、驪姫が夷吾宛の手紙を書いて夷吾に帰国を勧めるといった設定を初出本文に挿入したことで、驪姫は一国の政治を動かす存在に格上げされたと言える。

3) ⑯について。草稿⑯と初出本文⑯において、夷吾が里克を殺す動機はそれぞれ以下のように記されている。

里克が自分より先に兄のもとへ使者をやっていること、自分の擁立者として自分に独裁権をあたへないこと、そしてやがて自分を暗殺する陰謀の中心者となるかもしれないといふ理由があった。夷吾は(中略)「かかる大逆罪を犯したからには、到底、一國の大臣として生きながらへることは出来ずまい」と申しわたした。(草稿21頁)

ようやく驪姫殺害の真相をつかむにつれて、王は大臣を殺害するための、まことしやかな理くつを考案しはじめた。掌中の珠にしたかった女をむぎむぎ打ちくだかれたという、私怨だけでは理由にならない(初出本文320頁)

夷吾は、幕や屏風や壁の外側に配置してある、親衛隊の気配をうかがいながら、言った。

「里克よ。汝はまことに罪ぶかい男であるな。驪姫をころしたのは、罪ではない。だがお前さんは、父王の生んだ二人の王子、奚斉と悼子をころしたな。また、その二人の王子を守ろうとした忠臣荀息と、その一派の者をころしたな。汝は革命ずきの指導者ぶっている私利私欲をはかる新式悪人と申すのだ。それだけなら、まだ許せる。だが、お前さんは」

国王が両手を打ち鳴らすと、見えない親衛隊の剣戟、甲冑、弓矢のふれあう音がひびいた。

「あいかわらず、翟にいる重耳と連絡をたもち、わが晋国を転覆せんとくわだてているではないか。まず汝をころすこと、それが汝の好きな革命を実行することになるのだ」(初出本文322頁)

草稿では、夷吾は里克が自分を暗殺する陰謀の中心者となるかもしれないと心配して、里克を殺害したとされているのに対し、初出本文では、夷吾は驪姫が里克に殺害されたという真相をつかみ、「わが晋国を転覆せんとくわだてているではないか」というまことしやかな理屈で里克を殺したとされている。この変更によって、驪姫の政治中での存在感をより際立たせていると思われる。

4) ⑮について。重耳が里克の帰国の勧めを拒絶する動機は、それぞれ以下のように記述されている。

重耳は暗殺と叛乱の晉の國へ歸りたくはなかつた。里克とともに王宮の生活をつづけることも不愉快であつた。それと同時に、自分が王者になることを得意然と豫言してゐる里克の言葉に背くことによって、このおしかぶさってくる政治家に反抗し、それによって自分の運命を賭けて見たくもあつた。この様にはただしい行方定めぬ力の争ひのさなかにあつては、一度ぐらゐ自分の意志を主張して見ることも必要の様に思はれた。重耳はそこで次の様な理由をつけて晉へ歸ることを拒絶した。(草稿19頁)

彼が王となるのを拒絶したのは、決して古代の哲理に順つたわけでもなく、兄申生や大臣荀息の様に一なる精神を貫いたわけでもなかつた。あれは賢明な達見からした行為ではなく、いはば、あまりにも行動性のない自分自身を驚かしてやらうとする悪戯にすぎなかつたのだ。(草稿20頁)

ある日、彼女(咎如の女、引用者注)が「お国へ帰ることは、しばらくおやめください」と語った(初出本文316頁)

異族の女の教えを守って、重耳は里克の勧誘をきっぱりことわることにした。(初出本文317頁)

草稿では、重耳は自分の運命を賭けて見たく、また自分自身への悪戯心で里克の晉へ帰る勧めを拒絶したと記されているのに対し、初出本文では、咎如の女の「お国へ帰ることは、しばらくおやめ下さい」といった教えを守って、重耳は里克の勧誘を断つたとされている。咎如の女は、重耳にあてがわれた咎如という異族の美人である。「自分の意志」ではなく異族の美姫の教えにより、重耳が里克の勧誘をことわるという改稿は、咎如の女(異族の美姫)が政治の変化をもたらす者に変貌されていると思われる。

総括して言うならば、以下の内容が確認できるであろう。初出本文に付加されたCの「驪姫を生かすか殺すか、それが一国の政治のわかれ目なのである」という地の文によって、驪姫が担う役割が大きくなっていることが見られる。草稿⑩の「俺はあの妖婦を自分のものにし、(後略)」という言葉が初出本文の冒頭の一文になることと、草稿⑩の重耳と夷吾と別れる時の話が「一夜だけなんだが」に変更することにより、夷吾と驪姫の関係を深くしようという武田の意図が窺える。初出本文⑭の里克が驪

姫に夷吾宛の手紙を書かせ夷吾に帰国を勧めたという付加されている設定と、初出本文⑮の夷吾は驪姫が里克に殺害されたという真相をつかみ里克を殺したという改変によって、政治の中での驪姫の役割はより際立たされていると言えよう。初出本文⑮の自分の意志ではなく異族の美姫の教えに従い、重耳が里克の勧誘をことわるという変更によって、咎如の女(異族の美姫)が政治の変化をもたらす者に変貌されたと思われる。以上の改稿により、初出本文において、「一国の政治のわかれ目」としての驪姫と、重耳の行動の指導者としての咎如の女を武田はたんねんに描き出している。草稿において端役であった異族の美姫たち(驪姫にしる、咎如の女にしる)は、初出本文において歴史の裏面で暗躍し政治の方向が決められる人物に格上げされたと言えよう。

3、「幸福な重耳」と「天命」の削除

1) ⑤⑨⑪⑫⑱について。前述の1、2の異同以外、草稿から初出本文への大きな変更のひとつは、「幸福な重耳」と「天命」に関する記述の大部分が削除されている点に求められる。重耳が個人の幸福のみを追求していたことは、草稿⑤⑨⑪⑫⑱においてそれぞれ以下のように述べているが、初出本文において省いた。

草稿⑤ 彼(重耳、引用者注)はもとより幸福にならうとは努めてゐた。だが、他人を幸福にできるとは夢にも思はなかつた。これらの強い人々、兄と女と父とを幸福にしてあげる力が自分にはないことはわかり切つてゐたのであるから。(草稿5~6頁)

草稿⑨ これらの強い人々にたちまちつて、自分だけが何か幸福といふ夢を追つてゐる愚者なのかと、重耳はわれとわが身を怪しまずにはゐられなかつた。(草稿10頁)

草稿⑪ (自殺をすすめられた)は兄のやうに思い定めて自殺する気にはなれなかつた。どんなことをしても幸福をつかむまでは生きてゐたかつた。(草稿11~12頁)

草稿⑫ しかし、妻(咎如の女、引用者注)はもち子供は生まれても重耳は幸福にはなれなかつた。驪姫がもし妻として自分と起居を共にしてくれたら或は甘美な幸福がやってくるかもしれない。(草稿14頁)

草稿⑱ 驪姫の美しさを〇そっくりそのまま身につけて齊の女が面前にあらはれた時から、彼(重耳、引用者注)は幸福をつかんだと信じた。(草稿26頁)

2) また、草稿②における「天命」に関する以下の記述は、初出本文において省いた。

隠者（介子推、引用者注）は天の命と云ふことを常に口にしてゐたと言ふ。天の命に依って成功したくせに、自己の力によって成功したと誇稱する人人を嫌悪して山へ隠れたともいはれる。（草稿37頁）

天の命は洪水のやうに流れ、蝗のやうにおそひかかり、太陽のやうに輝いてゐる。美しき女も、強き大臣も、すべては織物の模様やうに天命の布を染めなす色彩なのであらう。ひそかに心にかかる精神も、軟く心をとろかす肉体も一本の糸、一握りの綿となつてこの布を支へてゐるのであらう。（草稿37頁）

重耳が晋の文公となり、論功報償が行われた。しかし、子推に俸禄は与えられず、子推もまた何も要求しようとしなかった。重耳が晋公の位につくのは天命であり、天の功績を盗むことはできない、という考えがあったからだ。重耳の臣下達は自分達の手柄だと考えており、それが許せなかった。子推の母親は、子推の廉潔の士として生きる覚悟を聞き納得した。子推は母を連れて山中に隠栖し、死ぬまで世に現れなかった。武田は介子推の言葉を借りて、草稿を「天命」と名付けた可能性がある。

五、おわりに

本論は、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における未発表の草稿類資料「原稿 天命」（資料番号 T0056535）などを考察対象として取り上げ、三つの方面から具体例を挙げて草稿と初出本文との異同を検討し、テキストの生成過程を分析した。結論として、「聖王」「悪王」像が明確化され、美姫たちが格上げされ、「幸福な重耳」と「天命」が削除された。ゆえに、小説のタイトルは草稿の「天命（幸福な重耳の物語）」（草稿では「幸福な重耳の物語」というタイトルの行の真ん中に二重線を引いた、筆者注）から、おのずから初出本文の「異族の美姫たち」（「王者と異族の美姫たち」）に変更しなければならなかったのである。

対談での「王者、徳の高い人」が「存在する意味があるはずなんだ」と強調したかった武田の「気持」は、小説の初出本文において「あの方（申生、引用者注）が徳のたかい、かけがえのない方だからそう言うんだ」、「そうすれば、晋の国は武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国になることができる」という付加した内容によって直接に表されている。ゆえに、本論が導き出した「聖王」「悪王」像が明確化されるという生成過程は、武田の「気持」を理解するには大切な役

割を持っていると言えよう。また、美姫たちの格上げという改稿も、異族の美姫（即ち胡姫）に「とても魅力を感じて好きなんだな」という武田の関心の表れだと言ってもいいのであらう。

これから、小説の生成過程を踏まえつつ、改稿の時代背景から詳しく武田が「悠久のものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」の「現代」的意義を検討したい。前述の「草稿 王者と異族の美姫たち」（資料番号 T0056786）において、武田は『秦女』とは、一九六〇年代の世界にたとえれば、アメリカ女、ソ聯女にあたるのでしょ。』と述べている。初出本文において、ただ「秦の国王は、他の小国に負けぬ大国の度量を示して、一ぺんに五人の美人を彼に贈った。その五人の「妻」の中には、弟夷吾の息子、人質として秦に送られた晋の太子の妻もまじっていた。」という一文のみの中で秦の美人に触れている。両者が対応していないが、武田が執筆当時の時代背景を意識しながら小説を作ることはいかたがえる。執筆当時、冷戦中に米ソを始めとする資本主義陣営と社会主義陣営の代理戦争ともいえるベトナム戦争は、（1955年に始まったが）1964年にアメリカがトンキン湾事件を起こして参戦した事で一気に全面戦争に突入した。日本国内においても60年安保闘争で混乱が続いた。こうした動乱の1960年代に面して、武田は「現実のきびしさを考える場合に」、「悠久のもの」（中国古典）から「よりどころとなり得るもの」である「徳」あるいは「王者（徳の高い人）」を追究し、「武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国」を唱えた。本小説において、武田の「ほしかった」「悠久のもの」の「現代」的意義は、中国古典を通して動乱の1960年代の難題を再検討することにあると言えよう。

【付記】 草稿資料の調査・閲覧・引用に際して、武田泰淳のご息女である武田花様や、所蔵館である日本近代文学館より、格別のご配慮を賜った。本論は2022年度日本近代文学会九州支部秋季大会における研究発表「武田泰淳「王者と異族の美姫たち」論—草稿類資料を手がかりに—」の内容に、加筆・修正したものである。発表の際に貴重なご教示を下さった諸先生方に心より感謝を申し上げる。

¹ 武田泰淳「司馬遷」（1943）『武田泰淳全集増補版』第11巻、筑摩書房、1978年、3頁

² 武田泰淳「司馬遷」（1943）『武田泰淳全集増補版』第11巻、筑摩書房、1978年、4頁

³ 武田泰淳「司馬遷」（1943）『武田泰淳全集増補版』第11巻、筑摩書房、1978年、4頁

- ⁴ 「女帝遺書」は旧名を「呂太后遺書」といい、雑誌掲載にあたって加筆修訂が施された。石崎等の論文「『廬州風景』の成立」(日本近代文学館編『日本近代文学館年誌:資料探索』(2)、2006)において、「『呂太后遺書』はのち手がける『司馬遷』の本紀を論じた末章『おそろしき女』と交響している」と述べ、「女帝遺書」と『司馬遷』との関係を指摘した。
- ⁵ 「王者と異族の美姫たち」は1967年12月発行の雑誌「別冊文芸春秋」(第102号)に発表され、のち1968年、講談社より発行の創作集『わが子キリスト』に収録された。その後、講談社文庫の『わが子キリスト』(1971)にも、筑摩書房刊の『武田泰淳全集』第9巻(1972)にも、新潮社より刊行の『武田泰淳中国小説集』(1974)第5巻にも、筑摩書房刊の『武田泰淳全集増補版』第9巻(1978年)にも、講談社文芸文庫の『わが子キリスト』(2005)にも収められた。なお、初出誌における標題は「異族の美姫たち」であったが、講談社版の創作集に収録のさい、現行のように改められた。
- ⁶ 竹内実・武田泰淳「戦争と中国と文学と」(対談、1974)『武田泰淳全集増補版』別巻2、筑摩書房、1979年、224頁
- ⁷ 杉浦明平「独特のわらいとレアリテ—武田泰淳『わが子キリスト』—」(書評)、『群像』24(3)、1969、184頁
- ⁸ 杉浦明平「独特のわらいとレアリテ—武田泰淳『わが子キリスト』—」(書評)、『群像』24(3)、1969、185頁
- ⁹ 兵藤正之助『武田泰淳論—昭和史に閃爍する作家』、東樹社、1978、258頁
- ¹⁰ 井口時男「武田泰淳の『世界』」(解説)『わが子キリスト』、講談社、2005、209～210頁
- ¹¹ 武田泰淳『武田泰淳全集増補版』第9巻「王者と異族の美姫たち」(1967)、筑摩書房、1978年、297頁